

The Pedagogical Implications of Multidimensional Vocabulary Acquisition through Deliberate Vocabulary List Learning

山本有香
(東洋英和女学院大学)

近年の大学英語教育では、語彙力強化の重要性に比して大学入学後に語彙数が減少するという傾向が見られる。こうした事態に対し、本研究は、学術語彙リスト (Academic Word List; Coxhead, 2000) を用いた意図的語彙学習法 (deliberate vocabulary learning) を採用することでいかに語彙喪失を食い止め、さらに多面的語彙習得につながられるかをテーマに調査を実施した。

従来、意図的語彙学習法の効果については語彙知識の「広さ (breadth)」のみに議論が集中しており、語彙知識の「深さ (depth)」にはあまり触れられてこなかった。これに対し本研究では、語彙の広さのみならず語彙の深さを測定することで、語彙習得を包括的に捉えることとした。

私立大学異文化コミュニケーション学及び経済学専攻の1年生185名を対象に1学期間、(a) リスニングとリーディングタスクに加え学術語彙リストを用いて意図的学習を行ったグループ (“AWL Group”)、及び (b) リスニングとリーディングタスクのみ行ったグループ (“LR Group”)、各々学習者が保持する語彙力を調査した。語彙の広さの測定には Vocabulary Levels Test (VLT; Schmitt, 2000; N. Schmitt, D. Schmitt & Clapham, 2001) 及び Productive Vocabulary Levels Test (PVLT; Laufer & Nation, 1999) を用い、語彙の深さの測定には Vocabulary Knowledge Scale (VKS; Paribakht & Wesche 1993) を使用した。

近年の研究では、意図的語彙学習法は受容語彙数を短時間に増やす効果があるという報告が多くなされているが、本研究の結果は語彙リストを使用することが語彙喪失を食い止め、さらに語彙の「広さ」と「深さ」といった多面的な語彙増強にもつながることを示した。また、本研究は語彙リストを使った意図的な習得法は初級レベルの学習者のみならず、上級レベルの学習者にも有効な語彙習得法であり、頻度の低い語彙 (学術語彙など) を習得する上でも非常に効果的な語彙学習法であることを示した。

この結果を踏まえ、更なる語彙習得の促進及び語彙保持のため、Nation(2008)が提唱する The Four Strands (Meaning-focused Input, Fluency Development, Meaning-focused Output, Language-focused Learning) を柱に、具体的な授業展開例を紹介する。